



文化の秋、食欲の秋など、この季節はいろいろな修辭がされますが、こんな話題はいかがでしょう。「ソニー坊や」です。とはいつても、全国的におなじみの卓上マスコット人形ではなく、沖縄で独自に分岐発展した約2メートルのコンクリート製交通安全人形です。佐藤栄作首相が来沖した1965年前後には設置され、現在、沖縄本島内に5体、残っています。トリウボウへ行こう、ラララン…のCMソングでおなじみの哲楽家・紀々(きき)さんは、実は、沖縄ソニー坊やの生みの親・新川唯介(しんかわただすけ)氏の孫で、電波堂☆沖縄ソニー坊や博物館の館長を務めています。紀々さんに、沖縄ソニー坊やの魅力についてうかがいました。(敬称略)

——沖縄ソニー坊やは、半世紀ほど前、県内各地の道端に建てられ、現在5体残っているそうですね。具体的にはどこに？

紀々 本部町謝花、宜野湾市野嵩、西原町兼久、うるま市安慶名、糸満市名城です。私たちはいま「沖縄ソニー坊やプロジェクト」の立ち上げを準備しているところですが、参加して下さる皆さんの情報(現時点)によりまずと当初は、久茂地の電波堂ビル付近をはじめ、沖縄本島各地に30〜35ほどあったようです。「離島にもいた」という情報はいまのところ寄せられていません。沖縄ソニー坊やは、卓上マスコットのソニー坊やと比べると容姿が少し違い

ます。卓上のソニー坊やのようにシティーボーイではなくブククリした体型で、その代わりに親しみやすい観があります。どうしてそうなったのかは工程の影響もありそうですが、いまのところ不明です。そもそも、約2メートルのコンクリート製ソニー坊やは沖縄だけのようで、それをだれがどこでどのように制作したのかも分かっていません。沖縄ソニー坊やの生みの親は、電波堂の創業者である私の祖父ですが、過去を振り返らず未来を見つめて生きるタイプでしたので記録を残さず、しかも70歳の若さで突然のように病で亡くなってしまったものですから、沖縄ソニー坊や誕生の経緯はまったく不明です。

——もう少し、沖縄ソニー坊やのプロデューサー的存在、新川唯介氏のプロフィールを。

紀々 新川唯介は、母方の祖父にあたります。戦後、米軍統治下にウエーラジオ社を設立(1949年)し、各種通信機器の修理・製作、有線放送などの事業を営んでいました。あるとき「東京にトランジスタラジオをつくっている人がいる」という話を聞き、訪ねた先が東京通信工業株式会社、後のソニーでした。以来、創業者である盛田昭夫氏、井深大氏と親交を深めました。ウエーラジオ社はソニーの沖縄総代理店になり、やがて、小売部門は電波堂、卸売部門は沖縄ソニー販売へ分か

紀々さんの推理は正しいと思う。知らない人にもお祖父さんの思いが伝わり、坊やを残さなくては、という気持ちに動かされるのではと言ってくださいました。

ハッピーな怪奇現象

——『週刊レキオ』の約30年前の特集で、道端に埋もれ、すっかり汚れてしまった沖縄ソニー坊やを取り上げています。その特集を企画するきっかけになったのは、Uターン青年からの「なつかしい坊や像を取り上げて」というリクエストでした。反響が大きく、その後、汚れている姿に「かわいそうだ」と思った某読者が、なんと、すべての人形(当時7体)を自腹で塗り直したエピソードもあらためて記事になりました。沖縄ソニー坊やの魅力は？

紀々 現存している各地の沖縄ソニー坊やは、きれいに塗り直されたり、その周りを緑化するなどされています。各地域の皆さんには「やってあげた感」などなく、「ウチの子」「あの子」という感覚で接しています。その地域に住む人々にとって、沖縄ソニー坊やは、それぞれ思い出に欠かせない存在なのでしょう。だからでしようか、他の地域にある沖縄ソニー坊やにはあまり関心を示さず、写真を見せると「ウチの子のほうがいい」という反応をします(笑)。私たちの会(ソニー坊やと仲間たち)に集う皆さ



とび出すな、車は急に止まれない、あげた手に、にっこり笑って、待つゆとり

「プロジェクト」の思いは

——「沖縄ソニー坊やプロジェクト」電波堂☆沖縄ソニー坊や博物館」について。

紀々 私は、祖父の足跡をたどるうちに沖縄ソニー坊やのことも調べるようになり、地元の皆さんやファンの

方々に大切にしていたらいいことを知りました。まずはお礼を伝えようと「ソニー坊やを語ろう&探そう会」を2014年12月に開き、それをきっかけに「ソニー坊やと仲間たち」という会ができました。現在、その会を発展させた「沖縄ソニー坊やプロジェクト」を準備していますが、プロジェクトに込める思いは「まずは、今いる沖縄ソニー坊やを守りたい」「もともとい昔の沖縄ソニー坊やの写真を集めたい」「沖縄ソニー坊やがどこにいたのか、沖縄ソニー坊やにまつわるエピソードを集めたい」「これまで沖縄ソニー坊やを大切に愛して守ってくださいました方々にお礼をお伝えしたい」です。ところで、私は、電波堂ビル3階のギャラリーホール「スペースアート」で「Studio紀々」を営んでいましたが、昨年11月、気持ちも新たに「電波堂劇場」電波堂☆沖縄ソニー坊や博物館をスタートしました。グランドピアノのあるレトロなレンタルスペースを使って、祖父が残した、戦後の沖縄をずっと見つめてきた歴史ある空間と沖縄ソニー坊やを残したい、という思いからです。

*問い合わせ

<http://sony-boya.okinawa/about>

沖縄ソニー坊やプロジェクト準備室

*電波堂☆沖縄ソニー坊や博物館は現在整備中

(聞き手 鈴木孝史 編集室タッカーハ ウス代表取締役)